

地獄一定の上に

「たとい、法然聖人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう。そのゆえは、自余の行もはげみて仏になるべかりける身が、念仏をもうして地獄にもおちてそうらわばこそ、すかされたまつりてという後悔もそうらわめ。いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」

吉水入室

建仁元年辛酉、三月十四日、

我が聖人親鸞は、ただ一人、希望の春にもそむきて胸暗く、とぼくと、朝まだ早く四条の橋にお姿を現したもうたのでありました。ちょうどその時、橋のかなたより、一人の御僧がこちらに来られるのとぱったりお会いになりました。これぞ安居院の聖覚法印でありました。

「これはく、範宴殿ではございませんか。」

「これはまたどなたかと思えば、聖覚法印様でございますか。お変わりもなく結構で御座います。」

「そなたはまたいかながなされました。私の思いなしか、お顔色もすぐれず、何とのおやつれが見えます。左様く、この頃あなた様は夜なく山を下りてどこにか通わせたもうと聞きましたが、真剣なる御精進感服の至りでございます。今日はまた何か子細のありげな様子、何れへお出でなされましたか。」

こうした偶然の会合に、我が聖人は、深い胸底の長い悩みをつつみなく語られるのでありました。法印は聞き終って、深く同情しつつ、

「……………左様でございましたか、それならば是非ともお耳に入れなければならぬことが御座います。今、洛東東山の麓、吉水に法然上人のましますことを御存知でございますか。法然上人こそは、学徳ならびなき、一天四海の明師、自ら聖道難行の教えをさしおいて他力易行の浄土門に帰し、専修念仏の一門を宣説して多くの人を救うていられます。あなたも速かに聖人の所に参上なされ、往生の要よくくお問いなされませ。私もまたその御教化を受けております。今日も今から参る所でございます。」

哀れ、四歳と八歳の時、父と母とに別れたまい、九歳の春、栗田口の青蓮院に、慈円慈鎮和尚を師として剃髪得度遊ばされ、後星霜ここに二十年、台星の峰にあつて、舎那円頓之菓を拾い、三密止観之水を汲みたまえども、迷惑出離の暁来らばこそ、わけてもここに二年、いよいよ生死巖頭、大悟の聖域にふれんものと、あるいは冬の寒きをも厭わせたまわず、無動寺大乘院に閉じこもりたまえ、食を絶ち人をしりぞけ、三七ヶ日長時の密行、あるいは終に洛陽六角堂の精舎に参籠して大悲救世観世音菩薩に、百夜祈願懇念を凝らしたもう。されども何の証もあらばこそ、色塵声塵猿猴の情、なお忙しく、愛論見論、麤膠の憶いよいよ堅し。三世諸仏の慈悲にももれ、一切の聖教にも見すてられし身か。我を導く知識はないか、我が身にかなうみ法はないか、我に道を授けたもう仏はましまさないか。

実に聖人が聖覚法印にお会いなされたのは聖人二十九歳、かくも行きづまりたもう日でありました。

聖人はその足で法然上人の吉水の禅室をお尋ねになりました。時に禅房には墨染の衣着たる門侶^{おでし}たちが十余人も集つてみ法の相続をしていられました。内も外も念仏で満ち、殊勝なる雰囲気につつまれてあります。何という叡山の空気との変わりであろう。当時、教界の腐敗、その極に達し、いたずらに紫衣金欄の袈裟衣に僧位を競い、京に出でては、歌に花に月に、この世の俗塵名利に乱れはて、あるいは山法師となつて三不如意の一に数えられるほどの横暴を働き、真面目に仏の道を求むる者も少い。それにひきかえて吉水禅房のこの空気、ここたく、何で来ることが遅かつたのであろう。そこに居ならびたもう方は、いづれも当時名を知られた学生たちばかり、驚かれた聖人はいと懐しくもご挨拶をなさつたのであります。

まもなく、法然上人はおよびになり、左右なくお会いが出来たのであつた。

「そなたが慈鎮和尚のお弟子、範宴少納言の君であるか。さる人ありと兼ねて聞いてはいたが、よくもおいでなされた。」

聖人は今初めて、六十九歳にならせたもう法然上人にお会いなされたのであります。ああ、温かなるその容貌^{みすがた}、慈愛こぼるるそのみ言葉、寂しくも両親を失える孤児は今、親とも思はるる念仏の聖者に会われたのである。魂の底深く何ものか微妙によろこびに希望に打ちふるうではないか。衷心より何ものかに生かされたもうこの様子、この前に一切を打ち出さないでおかれようか。

「私が範宴^{はんえん}でございます。今日ここに参りましたのも外の儀ではございませぬ。ただ、生死出離の道を問い奉らんがためでございます。何とぞご化導下さりませ。」

とて聖人は、父母の死、出家得度、学問修行、等々、去し方のすべてを物語り、生死出離の苦悶を残る所もなく語つて、み教えを乞われたのであります。

「さようであつたか。私もそなたと同じように保延五年春、九歳にして父を失い、十五歳にして叡山に上つたが、久安六年の秋、山を下りて黒谷慈眼房叡空師の門に入つたのも、生死解脱のためであつた。それから後、数年間、報恩蔵に入つて、幾度となくくり返し巻き返し一切経を拝読したけれども、胸中の疑雲煩悶の去らばこそ、保元元年の春、叡空のもとをも辞して、これより嵯峨の清涼寺に詣でて、夜なく、参籠の誠をこめたが、七日の祈願何の験もなく、それより奈良の興福寺に至り、蔵俊^{そうしゅん}より唯識を学び、更に京に帰つて醍醐寺の寛雅より三論皆空の教えを受けたが、これまた苦悶を治するに由なく、仁和寺の慶雅より授かりし真言の法も、中川寺の実範より受けし灌頂も我にとつてはただいたずらなる無生命の形式にすぎなかつた。哀れついに我を導きたもう人はなきか、我に開かるる生死出離の要路はなきか、泣くくも再び黒谷慈眼房叡空のもとに帰り、報恩蔵の中に入りて、我に的応する法門はないかと、なげきく、聖教に向つたが、ついにはからずも、善導大師の『散善義』を読みゆくうち、

「一心専念弥陀名号 行住坐臥、不問時節久近 念々不捨者、是名正定之業 願彼仏願故」

という文に至り、驚くべし、妄想疑念、たちまちに消え、無碍の智慧光、刹那に流れ来たり、千古の闇、突如として晴れ、不思議や、罪障そのままに助けられ、煩惱を断ぜずして涅槃を得るの妙境、生死出離の要道はただ念仏一行あるのみ、往生之業、念仏為本、生死輪転の家に帰ることはただ疑情あるが故のみ、速に寂靜無為の樂に入るには、ただ本願力廻向の信を要とする。一切のはからいをすてて彼の願力に乗托する時、我は天を仰ぎ地に伏して、仏恩の廣大に泣き崩れた。

こころみに思え、自ら初歡喜地の位に上らせたまいし龍樹菩薩は、十住毘婆沙論の易行品において『仏法に無量の門あり。世間の道に難あり易あり、陸路の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂しきが如し。』と説き、四十一段初歡喜地をすて、難行道をすて、易行道におもむきたもうたではないか。

また、かの千部の論主として仰がるる天親菩薩は、大無量寿経によつて浄土論を造り、『世尊、我は一心に尽十方無碍光如来に帰命し、安樂国に生れんと願いまつる』と告白したまい、曇鸞大師は、長生不死の神法を神仙に求め、やがて仙経を焼きすてて安樂に歸し、天親菩薩の浄土論を註解して細やかに六字の大法を宣揚せられ、道綽禪師は、聖道浄土の二門を別ち、『当今末法、これ五濁悪世なり、ただ浄土の一門ありて通入すべき路なり。』と説き、安樂集を残して念仏門を教えられ、ついに善導大師に至りては、觀無量寿経をつぶさに解釈して、悪人女人成仏の本願を光閃し、釈尊出世の本懐、仏の正意を明かにしたもうた。

我はひとえに善導一師によりて専修念仏一門に歸入したのである。我が朝に於いても、空也、源信、良忍、永觀等、これらの先哲はみな、一切の智慧修行をも打ち捨せて念仏一行に歸しられたではないか。

範宴どの、そなたの今日までの修行はことごとく聖道自力の難行であつたのだ。今、宿善めでたくも弥陀他力の名号に乗すべきである。罪業の深きを感じられるならば、他力本願に帰せさせたまえ、罪は十悪五逆いかなる悪人なりとも、自力をひるがえして本願を信じ、南無阿弥陀仏と念仏申せば、如来の光明、摂取不捨して、往生開覚まちがいあるべからず。我が身の善悪をばかえりみず、往生の業は念仏を以つて本となす。これをおいて他に如何なる生死出離の道があるうか。ゆめ／＼疑いたもうべからず。これ愚痴の法然坊、十悪の法然坊が申す念仏である。」

ああ、尋ねる人はここにあつたのだ。求める法はここにあつたのだ。
言々句々、信に輝く「よき人」の充実した語を聞け。

悟の確証しるしを尋ねること二十年、我が上にこれを発見するより先に、すでに救いきられて、心身共に、円かに、救いの確証に輝きたもう方があつたではないか。

親鸞聖人はここに立ちどころに他力摂生の旨趣を受得し、あくまで凡夫直入の真心を決定せられたのであります。そして即座に入門なされ、道綽の綽と源空の空とをとりて、その名を綽空と授けられたのであります。

絶対帰依

今や聖人は「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおほせをかうぶりに信ずるほかに別の子細なきなり」と、絶対に信ずることの出来る僧を発見し、その絶対人格に無条件に帰依せられたのであります。「たとひ法然上人にすかさねまいらせて念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。」と、古今かつてこれほどまでに師匠を信じきられた人があつたであらうか。由来、仏教は単に仏のみによつて成り立つのでもなく、法のみによつて、あるいは僧のみによつて成立するのでもありません。仏、法、僧の三宝によつて成立するのである。されば帰依三宝を説かぬものはありません。

釈尊出でて法を説きたまい、人、法を得て僧となる。

けれどもまた、釈尊は常に「我は師なくして独り悟りぬ」と宣ひ、また「我師は法なり」と叫びたもうを聞けば、釈尊は法を師とし、法に帰依してついに仏となられたのであつて、法こそ仏に先だちてつね常恒に存在し、この法より仏を生じ僧を生ずるともいひ得られます。

聖道門の立場がここにある。釈尊すでに入涅槃ましまし二千余年を経るといへども、僧によつて伝持され、経巻によつて遺された法がある。まず法宝を求めて我が出離生死の道を明かにしよう。二十余年の勉強修行は、一重にその眼が法の上に注がれてあつた。法相、三論、天台、華嚴、真言等の法を究めつくしなされたのも、修行、祈願、苦行にやつれたもうも、つまりは、如何なる法がよくこの無明の迷いを転じ悟を開かし得るかということにあります。

しかるに、燦爛として咲く大乘仏教の華は開き、求むる大法は我が前に輝けども、4法が高ければ高いだけ、いよいよ知らるるこの機の低くつたなく愚かなるをいかんせん。大法の前に得たるものは「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と、それだけではないか。仏を求めて得ず、しかして最後に得られたものが、実に「僧」であつた。

僧は人である。人格である、如来と共なる人格である。ここに僧に対する絶対帰依によつて新たなる道は開かれ、仏教本来の面目、帰依三宝の大道はすでに成就されたのである。「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおほせをかうぶりに信ずるほかに別の子細なきなり。」

この体験の告白を見よ。「ただ念仏して」とは法に対する帰依であり、「弥陀にたすけられまいらす」とは帰依仏であり、「よき人のおほせをかうぶりに云々」とは帰依僧である。ああ、仏か、法か、はた僧か、三体三にして三ならず、一にしてしかも一ならず、法然上人の上に、仏を見、法を見、僧を見る。三宝をまつとうじて、はじめて、僧は僧であり、法は法であり、仏は仏である。同体三宝の意義はここにある。

ねんごろに述べたもう言々句々、言葉は法然上人のみ言葉であり、流れ出づるところは上人の口頭舌端にはちがいが無いが、見よ、上人の背後には善導があり、その奥には釈尊ましまし、更に内奥には阿弥陀如来ましますではないか。言葉は法然上人を借るといへども、その中に盛られたるものは、全て如来大悲の真髓、千古に自然の浄土に秘められたる如来の秘密ではないか、法の法、如来の血潮は今、名号の乳によつて、腹ふくるるまで恵まれたのであります。されば師の上に如来の招喚と、その聖容を

拝したまいし親鸞聖人が、法然上人を如来の化現、大勢至菩薩の示現と仰がれたのであります。

「智慧光のちからより 本師源空あらはれて

浄土真宗ひらきつゝ 選択本願のべたまふ」

「善導源信すゝむとも 本師源空ひろめずば

片州濁世のともがらは いかでか真宗をさとらまし」

「眩劫多生のあひだにも 出離の強縁しらざりき

本師源空いまさずば このたびむなしくすぎなまし」

「阿弥陀如来化してこそ 本師源空としめしけれ

化縁すでにつきぬれば 浄土にかへりたまひにき」(和讃)

今や、法然上人の人格は、浄土の聖扉せいひを開きたまいし仏の御使、如来還相の善知識として、絶対動かすべからざる存在とはなつたのであります。

たとえ、法華の行者日蓮が「念仏無間」と獅子吼すといえども、この如来本願力によつて、真実を生き、真実を説き、真実を教えたもう「よき人」の存在を如何ともなし得るか。ただ仰ぐ、永遠の真諦、来りて聞け、彼の仏の本誓、たとえ、世のあらゆる論理が勝利に帰し、法然上人の教説は偽りであると確認せられようとも、しかも、みあとを慕つて行かねばおられぬこの心境、「すかさね奉りて地獄におちたりとも更に後悔」のない天地に、念仏の大道は厳存するのであります。

『執持抄』に曰く、

「たとひ弥陀の仏智に帰して念仏するが地獄の業たるを、いつはりて往生浄土の業5因ぞと、聖人授けたまふに賺されまいらせて、われ地獄におつというとも、更に悔しむ念あるべからず。その故は明師にあひたてまつらで止みなましかば、決定悪道へ往くべかりつる身なるが故にとなり。しかるに善知識に賺ずかされたてまつりて悪道へゆかば一人ゆくべからず、師とともにおつべし。さればたゞ地獄なりというとも故聖人のわたらせたまふ処へ参らんとおもひかためたれば、善悪の生所、私の定むるところにあらずというなりと、これ自力をすてて他力に帰するすがたなり。」
運命をさえ托する所に、新しい生活の意義と、広い世界が開いて来ます。だがこれは、いたずらに一旦の感情に走つての、み言葉ではなくて、愚痴の法然房と名告りたまひつつも、智慧第一の上人の上にひらめく智慧と真実を、確かに心の眼に見とどけたもうた、絶対帰依の言葉に外なりません。

かくして聖人は、「ああ、弘誓の強縁は多生にも値ひがたく、真実の浄信は億劫にも得がたし。遇たま行信を獲ば遠く宿縁を慶べ。もしまた此のたび疑網に覆蔽せられなば、かへりて復眩劫を経歴せん。誠なる哉。撰取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ。ここに愚禿の親鸞、慶ばしき哉、西蕃月支の聖典、東夏日域の師釈に遇ひがたくして今あふことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して特に如来の恩徳の深きことを知んぬ。ここをもつて聞く所を慶び、獲る所を嘆ずるなり。」と。

久遠劫の宿縁を感謝し、遇いがたくして遇い、聞きがたくして聞き、獲がたくして獲たることに、衷心の慶びをもって、新らしき浄土への生活を歩まれたのであります。

地獄一定

「その故は、自余の行を励みても仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄にも墮ちて候はゞこそ、すかさされたてまつりてという後悔も候はめ。いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」

これはまた何という大胆な告白であろう。はるばる十余ヶ国の境をこえて、聖人を慕つて、身命まで打ちこんで訪ね求めて来た同行たちに向かつて「いづれの行もおよびがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし」と衷心の声、赤裸々な相をなげ出して、包み飾られない。包み飾るのが凡夫の本性であつて、一分でも五厘でも、賢そうに、善良そうに、悟れるもののように見られたい。ましてや自分に対する随喜者の集りに於いてをやである。しかし聖人は決してそうした智識面をもたれなかつたのであります。

まことに釈尊の尊高は、無師独悟、菩提樹下に正覚を成就し、自ら仏たることを宣言し、一切衆生の親たるを感じ、天上天下唯我独尊を生きたもうたことにあります。釈尊の自内証の境地は凡智のはかり知ることを許されませんが、すでに釈尊に源を發したる如来法性の一河は幾多の尊き人を生みました。わけても龍樹、天親、曇鸞、道綽、6善導、源信、法然と、いわゆる七高僧は、弥陀本願の流れに光る巨星であります。これらの方はみな、久遠の如来を背後にして、一切衆生に向つて如来久遠の願心を表明して下さつた尊い方々であります。尊いのは尊い。

しかし尊いけれどもそれらの方は、あるいは大哲学者であり、あるいは聖者でありました。それらの方も、天上のものであつた仏教をだんだんと、大地に泣く愚痴なる悪人女人のものとしては下さつたが、極重悪人と名告られた源信和尚すら、横川の幽境に一切の愛欲名利を捨てて念仏した方であり、十悪の法然坊と自覚した法然上人の専修念仏も、現実には清い聖者生活の上に営まれたものであります。源信和尚の念仏生活も、法然上人のそれも、共に在家の凡夫として痛々しい家庭生活の上に経験されていらない。

人間の痛々しい苦悩は、多くその人をとりまく繋累から生れて来ます。ただの一人身であるならば、いかに食に困ると言つてもまだ解決しやすいが、親あり妻あり子あり弟妹あり、一家数人の繋累を持つ時、そこに物質と精神との両面に避くべからざる苦悩がはじまる。世の不況の底に毎日くり返さるる一家心中を思う時、いよいよこの感を深くします。

しかるに聖人は、すでに非僧非俗にかえり、家を持ち妻子を養い、噉肉妻帯の裏に念仏生活を営み、一切群生の限りなき罪業をご自身の上に見つめ、大地より湧き出でたる久遠の凡夫として七高僧に向い、さらにそれを通して如来に向かつて合掌し、教えを受け、名号を聞く人でありました。釈尊はじめ、七高僧の態度が浄土より来現せ

る如来大悲の権化として、光より暗に向かつて説く人であり、教える人であるならば、親鸞聖人は、一切群生を代表して、一切衆生の罪惡のあらん限りを、苦惱のすべを、更にその衆生心の願いや氣心の一切を、一身の上に見つめ、一切群生の内的運命を一身に荷負しつつ、暗より光に向かつて、ひたすらに救いを求めて、如来に帰命し、合掌して、聞く人であり、教えを受ける人でありました。

ここにただ観念的にでなくて、生活の中に、如何なる悪人も愚者も救われて生きることの出来る道が、南無阿弥陀仏のみ名において開かれたのであります。救済は大地のものとなり、一切衆生のものになりきりました。我らは「地獄は一定すみかぞかし」と目覚め、凡夫の本形ほんぎやうながらに合掌して、お念仏一つに生ききられた聖人の上にはじめ一切群生の罪業を一人で荷負したもうという法蔵菩薩の聖容を拝することが出来ます。

浄土門の救い

親鸞聖人は一生大地の聖者としてお念仏に生きられた人でありました。天上から降った権化の人ではなくて、地から湧いた久遠の凡夫の自覚にお立ちになりました。大地の上において、本能的な一切のものを浄化しきつて、仏の悟に証入しようとする聖道門では、ついに「地獄は一定すみかぞかし」と行きづまる外になかった。浄土門では、地上から天上へかけ上ろうとするのでなくて、光は天上より降り、力は大地に動くのであった。廢悪修善や、転迷開悟と自己を高めるのでなくて、惡は惡のままが転じて善とせられる、轉惡成善の自然のおんはからいに生きるのであった。

罪濁のこの機を捨てて、光の世界に到達しようとする所に聖道門があり、無限の光を背景にして、深い業障にさめてゆく所に浄土門の他力があつた。一つは智者となつて悟り、一つは愚者となつて救われる。業障は忘れたり、はからうことによつて解決がつくのでなくて、み光によつて業障にさめ、一切を受け取つてゆく所に、業障の解脱がある。多くの念仏行者たちは惡業を忘れ、あるいは惡業を厭いすてねばならぬように疑い、または捨てることが出来るように自惚うぬぼれて、ただ、燦然たる光明を仰いで、恍惚たる光の中に、救いが成就されるように思う。それはつぶさに仏と我とのすべてを知らぬ者の浅薄な考えであります。聖人は光によつて大地にうつる暗い影を見つめて、その上におどるお光を拝まれたのであります。

であるから如来の光明、攝取がはつきりすればするほど、深い罪惡の自己が見えて来る。深い久遠の業障がわかればわかるほど、如来大悲の深さがわかる。そこに、如来を知ることが自己を知ることであり、自己を知ることが如来を知ることであるという、不可思議な信が生れて来たのであります。

関東からたずねてきた同行たちは、深い業障をそつちのけにし、あるいはよくなられるように高上りして、腰を浮かしている人たちであつたのであろう。したがつて如来の本願をほんとに知らなかつたのでありましよう。

自然

大無量寿経には「自然じねん」という言葉が五十二ヶ所出ております。その自然という言葉葉を大別すると、

業道自然

願力自然（報土無為の自然をふくめて）

とであります。願力自然とは仏の因の自然で、仏の果の自然を報土無為の自然といいますが、今は願力自然一つにしておきます。

業道自然というのは、凡夫の善悪業報の自然のことです。業報に追い責められて凡夫が、自己を繕うてみた所で、飾って装うた所で、すぐその下から醜い業の相をさらけ出します。醜い相を包むことになれて偽善者になることは嫌なことがあります。無生命な偽善者を嫌うのはいいが、しかし、もし一歩あやまつて、本能的な、野獸的な醜い相をまる出しにして、これでいいのだと、恥じらう心も、懺悔の心もなくすることは、それは実に恐るべきことであり、戦慄すべきことであります。

現代は実には大胆に野獸の勝手に躍る時代であります。文明の中で、精神生活の低級な、文化に対する野蠻人の横行する秋であります。しかも自己の醜悪さを社会の罪に帰して、テンとして恥じない所の、理性すら盲いたる野蠻な行為が堂々白昼正義の名に於いて行われます。実に現代は文明を装うた原始的な裸形外道の躍る時代であります。

もし聖人のこの体験の告白の中から「親鸞におきては、たゞ念仏して、弥陀にたすけられまひらすべしと……信ずる……」この世界をぬきにして、あとだけを自分の上に弄ぶならば、それは実に剃刀かみそりを嬰兒が持つよりも恐ろしいことになります。即ち8業道自然をそのまま打ち出し、肯定してしまうことになります。古来、親鸞宗徒、否、仏教徒の中に、この大きなまちがいをどれだけくり返したことでありましょう。

如来の前に自己を偽つて、善悪を姑息に解決しようとして、お念仏を廃悪修善の道具に使おうとする者も、真実の浄土に生れることが出来ないが、もしそれを一歩あやまつて、救いの論理をもてあそんで、自己の醜いあさましい業の相の言い訳に使おうとしたり、裸形外道のまゝに横行して、それでいいのだと許したら、きわどい所で恐るべき生の破滅、三悪の火口に墮落おちしているのであります。

老境に念仏したまいし聖人は

「浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし

虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし。」

とお残しになったが、それは、聖人の悲嘆述懐であつて、不真実を肯定せられたのでなくて、悲嘆懺悔せられたのであります。であるから「愚禿悲嘆述懐」と題をつけ、その最後には「己上十六首、これは愚禿がかなしみなげきにして述懐としたり、この世の本寺、本山のいみじき僧とまをすも法師とまをすも、うきことなり」と書かれてあります。これみな聖人の懺悔の世界を表わされたものであつて、最後まで如来を見失わず、我を忘れない「信」の風光であります。

以上の如く言つたからとて、それは決して、如何なる悪人でも救われるということ拒むのではない。如来の本願力自然の救済には、善悪淨穢の差別なく、別して悪人こそ大悲の懷に救われるべきであることはもちろんであります。

自暴自棄か

「親鸞は、たとひ法然上人にすかされて、念仏して地獄におちたりとて後悔はない。その理由は、他の聖道の行をはげみて仏になれる身が念仏して地獄におちたのなら、すかされたという後悔もあろうが、いづれの行も及びがたき身であるから、もとより地獄は一定すみかである」とのお言葉を拝すると、聖人は、溺れるものは藁でもつかむといった風に、めくらめつぼうに盲信されたのではないか、あるいはまた、いづれおちるのなら、念仏でもせよ、助からなかつたつて、もともとで損はない、というような自暴的な、あるいは功利的な信ではないか、と取り違えている人がありはしないであろうか。「いづれ、釈尊だとか、聖人だとかいえば、俺たちよりも賢い人なのだから、信じた方がいい。疑いさえせなけりゃいい。」こんな風にかたよせている人もあります。

しかし考えて見なければならぬことは、聖人は容易に頭を縦には振らなかつた方だということであります。おいそれとものを肯定しなかつた人である。二十年一度も本当には頭を下げなかつた方である。機教相応、どんなに崇高な法であろうと、我が機がそれに相応しない時、我が機がびつたりと合つても第一義的満足の得られない時、聖人は何ものをも弊履へいりのごとく捨てました。そこには鋭い批判の眼が光っていました。

さらに聖人は、自己を偽り、ゴマ化すことの出来なかつた方であります。自己を偽ることが出来ぬからこそ、求道流転の苦悶があつたのです。いい加減に妥協すること9も出来なければ、屈従することも出来ない、何時も衷心の声に立ち上つて、真実をくぐと、にらんでお行きになつた最後が、法然上人にお出会いになつたのである。ここに聖人の一生の歩みを根本的にひっくり返すほどの、真実の人を見、真実の叫びをお聞きになつて、初めて衷心からの全的満足を感じ、自然に、徹底的に頭が下つて「すかされ奉りて……」との信境が生れたのであります。

今、日蓮上人の念仏無間の折伏に会おうと、ここには、動かすことの出来ぬ「地獄は一定すみかぞかし」の体験がある。論理で割り切れぬこの自証を如何にするか。また真実の教えによつて体得したる「罪悪も業報を感じること能はざる」この金剛不壊の信境を如何にするか。また、ここに厳存まします善知識を如何になし得るか。見よ、地獄一定を宣言したる聖人は、俄然、堂々たる万古不動の自信を宣説せられたではないか。